

GLOBAL VOYAGE

[グローバル ヴォヤージュ]

PEACE BOAT

2022

Summer

神秘のオーロラ

第二特集

夏にひんやり

世界のクールデザート

[発行](株)ジャパングレイス

一生に一度はオーロラを見たい 極北のオーロラ クルーズ



世界にはさまざまな絶景や秘境がある。そのなかで「一生に一度は見たいもの」を思い浮かべていったとき「オーロラ」をあげる人は少なくないだろう。神秘的という形容が最もふさわしい、その姿は遥か昔から人々を魅了してきた。ピースボートクルーズでも高い人気を誇る極北のオーロラクルーズは、船だからこそ見ることのできる光のシンフォニーを堪能できる。

PEACE BOAT Aurora Cruise

GLOBAL VOYAGE
2022 Summer

CONTENTS

特集

一生に一度はオーロラを見たい
極北のオーロラクルーズ…………… P3

漆黒の夜空に出現する
光のカーテンとの出会い…………… P4

海に反射し星を包む
船上で体感するオーロラは
我を忘れるほどの光景…………… P6

オーロラツアーを
盛り上げる船内企画…………… P8

乗船者インタビュー…………… P10

カメラマンインタビュー…………… P11

第二特集

夏にひんやり
世界のクールデザート…………… P12

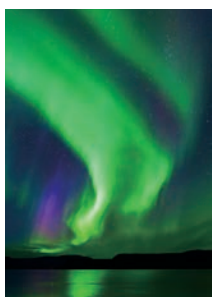
水先案内人インタビュー
古今亭菊千代さん…………… P14

ブラジル最大の貿易港
[サントス]…………… P16

PEACE BOAT ACTIVITIES…………… P18

表紙の写真

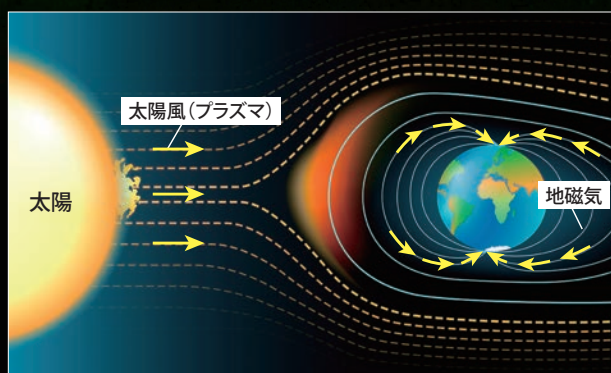
色、形、大きさ、そして動きも同じものはない。一期一会のオーロラとの出会い。



Aurora Cruise

漆黒の夜空に出現する 光のカーテンとの出会い

北緯60度から70度。北極圏に手が届くエリアの夜空を彩るのがオーロラだ。神出鬼没の自然現象であり、いつ見ることができるのか、誰にもわからない。夜空いっぱいに繰り広げられる「女神」の舞いは、言葉を失うほどに圧倒される体験だ。船上にて移動しながら見るオーロラは、より臨場感をもって迫ってくる。神秘と出会える幸運に恵まれれば、その美しさは一生まぶたの裏に焼きつくだろう。



オーロラが発生する仕組み

科学の発達とともにオーロラの発生原理は明らかになっている。地球は大きな磁石と同じで南極はN極、北極はS極になっている。電気をもった粒(電子や陽子)が太陽から飛んできると、N極やS極に引き寄せられ、空気の粒と当たって白や赤、緑の光を出す。この現象がオーロラである。オーロラの色や形、移動速度もさまざまで、光を放ちながら出現する。

そんなオーロラがどのようなようにして生まれるのか科学的に解明されている現在でもなお、その姿を目にしたものはこの世のものとは思えない神秘や驚異を覚え、超自然的な存在として感じてしまう。通常オーロラを自分の目で直接見ようと思えば、カナダやアラスカ、もしくはフィンランドなどまで飛行機を使って訪れることになる。そのため、ピースボートクルーズのように大型客船で世界一周の航海中に鑑賞しようとする試みは世界的にもとても珍しい。時代を越えて人の心を動かしてきたオーロラとの出会いに胸ふくらませ、極北の地へさあ、出かけよう。

人間の想像を超える事象であるがゆえに、世界各地で神話や伝説が残されているのも興味深い。北欧神話ではオーロラは女神ワルキューレの盾と鎧の輝きを反映したものととらえていて、古代ギリシア人もオーロラに関する多くの神話を残し、太陽の神と月の神が駆け巡るために発生したとされている。

人間の想像を超える事象であるがゆえに、世界各地で神話や伝説が残されているのも興味深い。北欧神話ではオーロラは女神ワルキューレの盾と鎧の輝きを反映したものととらえていて、古代ギリシア人もオーロラに関する多くの神話を残し、太陽の神と月の神が駆け巡るために発生したとされている。

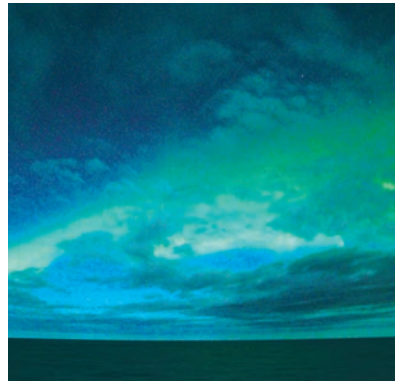
「宇宙からの贈り物」といわれるオーロラは、地球上で最も美しい自然現象のひとつである。極北の空のもと、鮮やかなオーロラの舞いに包み込まれるのは唯一無二の圧倒的な体験だ。

オーロラとは、ローマ神話の暁の女神アウロラ(Aurora)に由来している。アウロラは知性の光であると同時に創造性の光でもあり、地上の生き物に生きる力をもたらすものである。名付け親は諸説あるが、ガリレオ・ガリレイという説も有力だ。その名が使われ始めたのは17世紀頃からだが、観測記録は紀元前から残っておりギリシアの哲学者アリストテレスは「天の裂け目から吹き出す炎」がオーロラであると考えていた。また日本でも日本書紀に「雉(きじ)の尾に似た赤気(せつき)」として記録が残り、鎌倉時代の藤原定家の日記『名月記』にも赤気を見たと記されている。

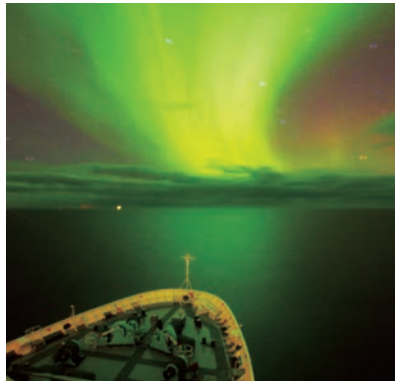
これまでのピースボート クルーズで出会ったオーロラの数々



生きているように姿を変え色を変え、圧倒的な美しさと神秘さで、見る者に迫ってくる。



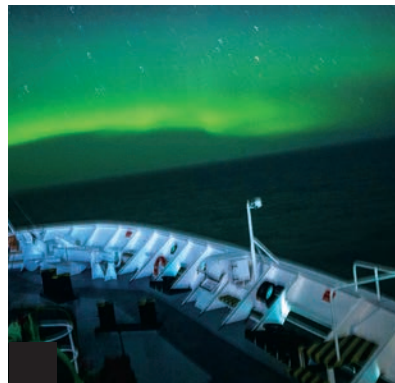
オーロラの隙間から青い空のぞく。



船の前方からオーロラが本船へ向かってくる。



人が少なく特等席となったデッキ最上部。



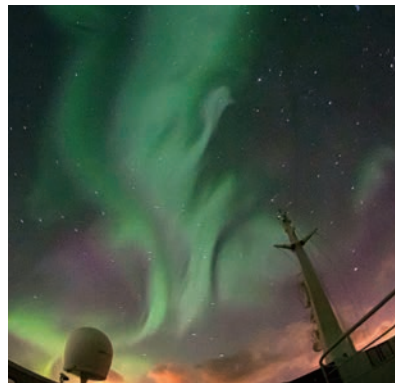
遠くに見えるオーロラもまた神秘的だ。



船の真上で爆発したかのように見えるオーロラ。



暗い夜空をステージに幾重にもたなびく光のカーテン。



刻々と姿を変えては現れ消える暁の女神。



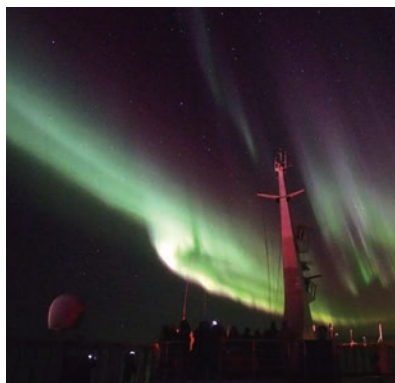
光のグラデーションが見る者を圧倒する。



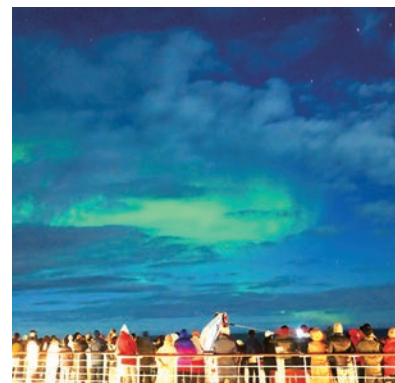
緑の龍が天空に現れたような錯覚をおこさせる。



船全体をすっぽりと包み込むような光のベール。



暗闇の中をカメラのフラッシュが蛍のように舞い踊る。



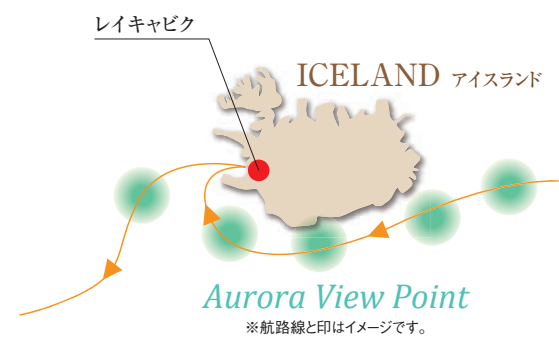
多くの旅仲間と受け取る「宇宙からの贈り物」は格別だ。

Aurora Cruise

「海に反射し星を包む」

船上で体感するオーロラは 我を忘れるほどの光景

ピースボートクルーズのオーロラツアーはアイスランド沖を約一週間かけて巡る。アイスランドは北緯60度から70度の「オーロラベルト」と呼ばれる帯状エリアの直下に位置し、オーロラ鑑賞には最適だ。寄港地のレイキャビクに向けて、条件に応じて島の北側か南側が直前に航路が選択され、胸躍らせながら夜空を眺める日が続く。



約一週間のあいだ、オーロラを見るチャンスは5回前後。オーロラ水先案内人が米航空宇宙局（NASA）などの配信するデータや、現地のリアルタイムな情報、さらには、雲の動きなどを分析しその出現を予想する。そして誰もがワクワクしながら、その時を待つ。しかし予想は出て、いつ出るか、どのくらい出るか、どんな色かなどはわからない。そのためオーロラの出現を知らせる船内放送が流れたら、食事中でも夜中でも、いざデッキへ。

ことある。その様子を「オーロラが爆発した」と表現する乗船者がいる。また船の真上で緑のカーテンが生きもののように動く様に「ここは地球ではない」と感じたスタッフもいる。

1000人を超える乗船者、スタッフ一同その出現を毎夜祈る。必ず出現するとは限らないため、現れたときの喜びは大きく、デッキで大勢が一体感をもつてオーロラを迎える体験はかけがえのないものだ。またクルーズではオーロラが海に反射することで幻想感が増し、さらにオーロラの向こうには輝く星も無数に見える。この世のものとは思えない光景に我を忘れ、まさに「宇宙を感じながら」言葉にならない言葉を発し、ただただ見とれるだけだ。



寄港地の
レイキャビクは
オーロラが
見られることも

オーロラ鑑賞時には 温かいスープをご用意

デッキは寒いので、温かいスープがありがたい。またオーロラツアー期間は「夜型生活」に対応し、buffetや居酒屋「波へい」も時間を変更してオープン。温かい飲み物や食べ物をとることができる。



オーロラツアーを 盛り上げる船内企画

オーロラツアーがはじまる一週間ほど前から、船内ではオーロラにまつわるさまざまな船内企画が催される。船内は「オーロラを楽しもう!」という雰囲気に満ち、全員で盛り上がって、という一体感が生まれる。どのような船内企画があるのか、過去のオーロラツアーに乗船したスタッフに紹介してもらった。



上野 泰寛

船長やオーロラ水先案内人とともにオーロラ鑑賞をオーガナイズする。

木村 希望

過去のオーロラクルーズにはすべて乗船し、スタッフからは「オーロラ姫」という愛称も。

吉田 岳洋

オーロラ鑑賞チャンスのある区間にオーロラ関連の船内イベントをプロデュースする。

アイスランドのレイキャビクはオーロラ鑑賞ができる首都として有名。



オーロラの講座に興味津々

オーロラ水先案内人のアクセルさんをはじめピースボートスタッフが事前にさまざまな講座を開催。知れば知るほどその魅力に惹かれるのがオーロラの神秘性。

鮮やかな
特別料理が
オーロラクルーズを
盛り上げて
くれます



オーロラをイメージした 料理やデザートがテーブルを飾る

和食の「オーロラ御膳」やコース料理の「オーロラスペシャルディナー」などオーロラにちなんだ料理を提供。視覚で楽しめば気分もまた盛り上がる。



オーロラをテーマにした ファッションショー

オーロラツアーの定番となっているショー。それぞれのオーロラの表現が楽しく、大勢の観客が集まって盛り上がる。ご自身でデザインしたオリジナルの衣装で登壇する参加者も。



「オーロラベルトに入っていく前に、船内がオーロラをイメージしたライトやテーブルなどで華やかに装飾されはじめ『いよいよオーロラだ』といった感じで気分も盛り上がってきます。『オーロラの撮り方』という撮影講座は毎回開かれて、多くの方が受講しています。スマホでの撮り方も教えてくれるので役立つと思いますよ」(吉田)

「バイキングの血筋をひくオーロラ水先案内人アクセルさんのオーロラ講座は人気です。神話の話なども

興味深いですね。また思い思いにオーロラを表現する『オーロラファッションショー』も盛り上がりがあります。乗船されたら、ぜひ参加してみてください」(上野)

「オーロラは宇宙を感じるものなので、待っている間に『宇宙について語ろう』という企画をたて、参加者それぞれの宇宙観を語りあったことがあります。また記念撮影用に『オーロラ顔はめパネル』を製作したこともあります」(木村)

オーロラ水先案内人

アクセル・オスカーソンさん

ピースボートはオーロラ観測で最もロマンあるクルーズ船

船でオーロラを見る場合、変わりやすい天候に合わせて観測地点を移動できる。見えそうな場所に柔軟に行くことができ、乗船者は暖かい部屋で眠って待つこともできる。これが陸の観測と違うところ。また昔と違い、何時間も前に雲の動きや気象情報を入力できるなどテクノロジーが進化し、そこに私の知識と経験、現地陸上とのネットワークを総動員して探すのですから見える確率は高くなりますよ。私自身はオーロラツアーで船に乗るのはピースボートだけです。船長は観測に対する柔軟性があり、航海技術、スタッフの専門知識は高く、一緒に仕事するのが最高に楽しい仲間です。これまでオーロラの出現の前に、大勢の方が興奮し、喜んでくれた姿が忘れられません。ピースボートは「魔法のクルーズ船」です。オーロラを見るうえで最もロマンのあるクルーズ船であることを保証します。また皆さんに船上でお会いできることを楽しみにしています。



オーロラが
見られるように
願いを込めて
つくります



子どもの頃以来につくる「てるてる坊主」

オーロラは、出る予想があったとしても必ず見ることができないものではない。だから「良い天気に恵まれますように」「私たちの前に出現してくれますように」といった願いを込めて「てるてる坊主」が飾られる。



水本さんがはじめて船上で撮影した際の一枚。船とオーロラをセットで撮ればクルーズの記念となるのでおすすめ。



Photographer Interview

「思わずファインダーから目を離す そんなオーロラは初めてでした」

ピースボートが洋上で出会ったオーロラは、写真家の目にはどう映ったのか。過去にオーロラの撮影経験があり、クルーズカメラマンとして船旅に同行した写真家・水本俊也さんに話を伺った。

オーロラを観測するクルーズは、そもそも数が少ないうえ、ほとんどが定期航路を持つクルーズです。船が積極的にオーロラを探して移動するクルーズは本当に珍しい。クルーズにカメラマンとして参加できたことは非常に貴重な経験だったと思います。

このクルーズの良さのひとつは臨場感だと思います。オーロラは空を移動することも多いのですが、その動きに合わせて船が進路を変える。この、オーロラに向かって突き進んでいく感覚にはすごくワクワクしましたね。

船の先に雲の切れ目が見えた時、「ここを抜ければ必ずオーロラは見える」と半ば確信に近いものを感じていましたが、まさかあれほどの



水本俊也 MIZUMOTO Shunya

写真家
1972年生まれ 鳥取県出身、横浜市在住
日本写真家協会 (JPS) 会員
キャンノンジュニアフォトグラファーズ講師

オーロラに出会えるとは思っていませんでした。完全に予想を上回りましたね。私はこれまでノルウェーやグリーンランドで6回ほどオーロラを撮影してきましたが、間違いなくナンバーでした。大規模すぎて全貌をカメラのファインダーに収めきれないほどでしたから。また、撮影中に私はカメラのファインダーからあまり目を離さないのですが、今回は思わずカメラから目を離して、自分の目で見えるオーロラの余韻を楽しんでしまいましたね。

もっというんなシチュエーションで船から見るオーロラを撮影したいですね。実は今回のクルーズにもぜひカメラマンとして参加させてほしい、とスタッフの方には伝えているんです(笑)。



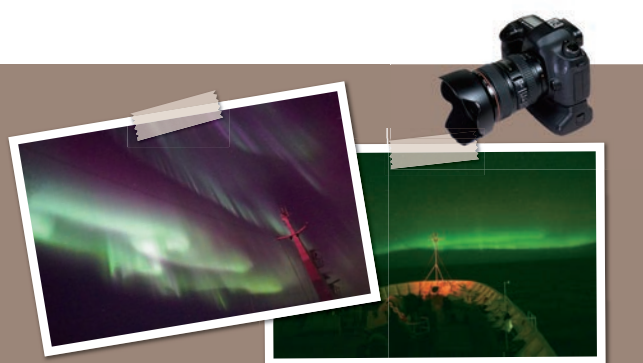
水本俊也のオーロラ撮影ワンポイントアドバイス

ここがポイント!

- ①感度：3,200~6,400に設定。
- ②手ブレ対策：三脚を使用。(なければ落ち着いたシャッターを切ればOK!)

ここに注意!

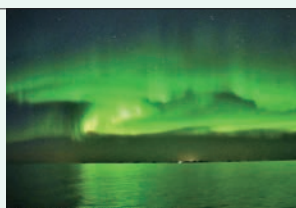
- ①船の一部を使ってカメラを固定するのはNG! 船のエンジンの振動でかえって大きくブレてしまいます。
- ②自分の目でも見る!ファインダーを通して見るのとは違う感動を味わってください。



Passengers Interview

「ザ・オーロラを見た」「生忘れない」

過去のオーロラツアーで素晴らしいオーロラと巡り合うことができた、泉さんご夫妻。「生忘れられない素晴らしい思い出になった」、その体験を紹介してもらった。



英伸さんが実際にレイキャビク沖で船上から撮影した一枚

泉 英伸さん・千栄子さん

第81回クルーズに定年退職を機に参加。その後、第102回クルーズにも乗船し、長年の夢だった南半球と北半球それぞれのコースで世界一周クルーズを体験。



「オーロラをぜひ一度見てみたい」という思いでピースボートクルーズに参加した泉さんご夫妻。オーロラベルトに入った二週間は昼夜逆転の生活リズムにして、できるだけ夜は起きて、オーロラの出現を待ったそう。序盤から幸運に恵まれてオーロラを見ることもできたが「何といっても素晴らしいのは五日目のオーロラでした」とのこと。その日、早い時間からオーロラ出現の船内放送が響くなか、友人たちとデッキにいた千栄子さん。「最初は遠くの方で白く現れたオーロラが段々近づきながら色を変え、ついに頭上にきました。黄色や紫のオーロラがまるでカーテンが降りてくるように踊る姿に圧倒されました。みんなで『見たわねー!』『出たねー!』と興奮して喜び合いました」

「別の場所で観測していた英伸さん。『それはもう、ザ・オーロラ、というのを見た感じでした。日頃の行いが良かったのでしょうか(笑)。その日は断続的に現れましたが、色が変わり姿が変わり、見飽きることはありませんでした。また海面が緑一色になりこれもまた幻想的でしたね』。お二人とも「生忘れない」「まさに神秘の世界」と振り返り、「機会があったらぜひ参加してください」と語った。

オーロラ鑑賞防寒グッズは船内ショップで!

オーロラツアー時のデッキは極寒のスキー場にいるようなもの。防寒具は必需品だ。風を通さないアウターをはじめ、手袋、撮影用に指先の開いた手袋、マフラー、耳当て、カイロもあった方がいい。ピースボートクルーズでは船内ショップで有名アウトドアブランド商品を販売予定。



ニット帽	耳あて	カイロ
マフラー	厚手の靴下	手袋

※防寒グッズは船内ショップにて各種取り揃えています。

夏にひんやり

世界のクールデザート

暑い夏に、冷たいデザートを食べたくなるのは世界共通。世界各国を眺めると日本でも定番になっているものがある一方、まだ知られていないものもあって楽しい。いつか食べてみたい、ひんやり甘いおやつを恋しく思いながら、誌面からひとときの涼を感じてほしい。



雪花冰
(シェーフアービン)
Taiwanese shaved ice

かき氷の上に甘くてフレッシュなフルーツがたっぷり盛られて、さらにバニラアイスや練乳などをのせて食べる。



ソフトアイス
Softis

ノルウェー人が愛するソフトクリーム。日本のものよりもう少し重厚な口当たり。トッピングを思い思いに楽しむ。



スパゲッティアイス
Spaghetti eis

アイス好きのドイツ国民に愛され続ける名物。名前の通りスパゲッティの外見をしていてイチゴソースがかかっている。



シェイプアイス
Shave ice

ハワイきっての人気スイーツ。きめ細かくふわふわした氷にかけられる、色鮮やかなシロップが特徴。



フローズンスモア
Frozen S'More

冷たいアイスとチョコをマシュマロで包んで冷やし、パリッと焼き目をつけたもの。食感が楽しい。



ホーキーポークー
Hokey Pokey

さとうきびエキスを作られたゴールデンシロップを用い、キャラメルを混ぜこんだアイスクリーム。甘さとバリバリとした食感が楽しめる。



ドンドウルマ
Dondurma

トルコ語で「凍らせたもの」の意味があり、粘り気があり伸びるのが特徴。羊乳や植物の根を乾燥させたものから作る。



ファルーダ
Falooda

ローズシロップ、バジルシード、ゼリー、タピオカなどを混ぜミルクやアイスクリームを注いで作る。



カッサータ・シチリアーナ
Cassata siciliana

緑色のマシパンでスポンジケーキ、リコッターチーズを包み、フルーツの砂糖漬けで飾り付けられているスイーツ。



パレタ
Paletas

メキシコの棒付きアイス。フルーツベースのシャーベット系と牛乳ベースのクリーム系がありフレーバーは多彩。

クルフィ
Kulfi

16世紀からあったといわれる、牛乳を煮詰めて作る氷菓。泡立てずに作るため固くて溶けにくく濃厚な味わい。



ブーザ
Boozza

植物の粉末と食用ガムでとろみをつけたトルコアイスのように伸びる粘り気の特徴。ピスタチオをまぶして食べる。



ピーチメルバ
Peach Melba

砂糖で甘く煮た桃にバニラアイスとシロップを添えラズベリーソースをかけた、グラデーションが美しいデザート。



チョラド
Cholado

イチゴやバナナ、チェリーなどのフルーツにコンデンスミルク、そして細かい氷がびっしり入ったトロピカルジュース。



ハロハロ
Halo-halo

かき氷とパフェをミックスさせたようなスイーツ。ウベ(ヤムイモの一種)の鮮やかな紫色のアイスクリームが特徴。



チェンドル
Cendol

米粉やタピオカなどを原料にした、ゼリーのような食感が特徴。発色のいい緑色はパンダンリーフという葉の色。



ルクマアイスクリーム
Lucuma ice cream

三大栄養素をはじめ、鉄や食物繊維などが豊富な栄養満点のダイエットフルーツ「ルクマ」を用いたアイスクリーム。



「宝もの」を見つけることができる ピースボートクルーズ

落語家 古今亭菊千代

これまでピースボートクルーズに水先案内人として数多く乗船されている落語家の古今亭菊千代さん。ピースボートクルーズの思い出や楽しみ方、ご自身のワークシヨップなどについて伺った。

ブラジルで落語を それが初乗船

—菊千代師匠とピースボートクルーズの出会いは何年前ですか。

2000年に、さまざまな事情で日本からブラジルに移住した方々の前で落語を披露しませんか、というお誘いを受けたのが最初です。地球の反対側まで行き落語ができるなんて光栄だと思いついてお受けしました。その前にショートクルーズに乗船していましたが地球一周としてはそのときが初めてでした。ブラジルでは大勢の方に落語を聞いていただき、終演後にご高

齢の女性が寄つてきて「今まで移民として苦労したけれど生きてて良かった」と言ってもらえました。

その苦労が偲ばれて私も涙がプワーッと出て一緒に泣いたことを覚えています。その後は定期的に乗船するようになり、20年間でショートクルーズも含めると30回ほど乗船しています。

—印象に残っている寄港地はどこですか。ブラジルは何回か訪れていますが、やはり日系の方の移民当時の話は胸に刻まれます。アルゼンチンも落語を披露した国なので印象に残っています。またパナマやグアテマラの先住民



それが一人ではなく何人もいますから、回数は多くなりますよね(笑)。また水先案内人同士の付き合いも大きいです。ピースボートに乗船しなければ絶対に会わないような方々と知り合えます。たとえば軍事評論家や海外在住のミュージシャンをはじめ多くの方とのご縁をいただき、下船後もお付き合いは続いています。そういうさまざまな魅力を持った方々と一緒に旅ができるのは素晴らしいことです。

世代、立場を超えた 交流が一番の魅力

—ピースボートクルーズの魅力はどんなところにあると感じていますか。

たくさんありますけど、ひとつは他の船旅のように観光もできますが、

現地の人々とふれあったり、さまざまな施設などを訪れたりする交流プログラムが特徴だと思います。普通なら会えない人、行けない場所にピースボートならではのネットワークでナビゲートしてもらえますからね。また船内では世代を超えた交流ができることでしょいか。高齢の方は自分の子どもや孫の世代の人たちとお話して「今どきの若者はこんなことを考えているのか」とか、若い人は逆に「こんな素敵な大人がいるんだ」といったことを感じられる。世代、立場を超えた交流ができるのはピースボートだけだと思います。

弟子たちの晴れ舞台は かけがえのない体験に

—毎回、乗船者からお弟子さんを募集してワークシヨップを開いていますね。どんな内容なのですか。

発声練習からなぞかけ、大喜利、小噺、リレー落語などです。毎回平均すると30名ほどが弟子入ります。芸名も付けて練習の集大成として発表会もあつて、それはもうすごく盛り上がります。緊張しますが、やり遂げた達成感も大きいんです。まさか船上でこんな経験をするなんて、つて(笑)。この船上での「二門」も年齢や上下関係なく、お互いの成長を喜び、応援し、すごいいいチームになります。下船後にも集まることも少なくないそうです。私も次回が今から楽しみです(笑)。

さまざまな人とご縁を いただき毎回楽しみ

—ピースボートに何度も乗船したいと思うのはなぜですか。

一つはスタッフとのつながりがありますね。乗客だった若者が、下船後スタッフになり、その過程で個人的にどんな交流が深まります。だからそんなスタッフから船旅のお誘いを受けると、どうしてもまた乗りたいと思う。



Profile 古今亭菊千代 (落語家)

昭和59年、古今亭円菊 門下に入門、平成5年に先輩の三遊亭歌る多師と共に江戸では初となる女性真打に昇進。以降、本来の寄席やホール、各落語会の出演のほか、手話と一緒に楽しむ落語、朝鮮・韓国語での落語、新作、自作品、エッセイ、また、南米など海外の日系の方々の前でも多数口演。



洋上で生の落語を聴けるのはとても貴重だ。



「弟子」たちの発表会にて。大勢の観客を前に練習の成果を出しきって、みんなで大きな達成感を味わう。



時には南京玉すだれを教えることも。



「宝もの」が見つかる クルーズへいざ

—これから乗船予定の方へメッセージをお願いします。

ピースボートクルーズは初対面の乗客同士、ゲスト、スタッフ、クルー、現地の入すべての人と仲良くなります。気取りのない船旅です。船内にはプログラムが豊富で、あれもこれも始めたくなくなる。ご自身の興味や関心の扉を開けてくれるでしょう。私は毎回、クルーズを通して人との出会い、かけがえのない体験、時間、初めてふれるモノといったように必ず「宝もの」を見つけます。きっと皆さんも「宝もの」を見つけ、手にすることができるとは思いますが、どうぞ今から胸躍らせて楽しみに出航の日をお待ちください。





白く長い砂浜が広がる「サントスピーチ」とマンション群が建つ街並み。

ブラジル最大の貿易港

[サントス]

Santos, Brazil



サンパウロ州にある港湾都市サントス。ピースボートクルーズとして初寄港になる。コーヒーの輸出港として発展してきた歴史があり、石畳の古い街並みも風情がある。また美しい景色が広がるブラジル屈指の観光地であり、年中海水浴が楽しめるビーチは大勢の人で賑わっている。

ブラジルはコーヒーの生産量世界一であり、消費量も世界二位。サンパウロ州もコーヒー産業が盛んだ。ブラジル最大の貿易港サントスは、コーヒーの輸出港として知られ、国内のコーヒーの大半がここから世界中へ届けられている。そんなコーヒーで繁栄してきた歴史を知るには「旧コーヒー取引所（コーヒー博物館）」がうってつけだ。取引所としては1950年代に閉鎖されたが、1998年に博物館として再スタートをきった。石造りの重厚なドーム屋根の建物だから旧市街地ですぐに見つけることができるだろう。コーヒー関連の展示物のほか、パスタやラテアートの講座があり、カフェでは博物館らしく豊富なメニューが揃っていて珍しいコーヒーを楽しむこともできるし、豆の販売も行っているので土産におすすめだ。

「モンチ・セハーの丘」は市内を一望できる小高い丘で、ケーブルカーで上ることができる。斜面をゆっくり進み4分ほどで頂上に着いたら、展望台から素晴らしい景色を望んでみよう。コンテナ船が行き交うサントス港が入り組んだ湾のなかに位置していることがわかる。展望台から見えるサッカースタジアムは世界的に有名な「サントスサッカークラブ」のホームグラウンド。サッカーの神様ペレが活躍したチームとしても知られ、グッズ等も販売されており、世界中のサッカーファンが立ち寄るスポットだ。サントスのビーチは、緑が多く美しい。4マイルにわたって延びる海辺の樹木によって道路と隔てられ、この緑の帯は遊歩道になっている。庭園や水族館などがあり、散策しながら観光するには気持ちのよいエリアで、料理屋台も出ていて軽食をとることもできる。またサントスは日本人の移民が初めて上陸した土地であり、1908年から戦前戦後を通じ65年間で約25万人が移民となった。1998年には日系移民90年記念碑が建立され、現在その碑はビーチ沿いにあるエミサリオ・スブマリノ公園に移転されている。



長く続くビーチでは黄金色の夕日美しい。



コンテナ船が行き交うブラジル最大の貿易港サントス。



2



1



5



4



3

1:サントス湾と旧市街を一望できる「モンチ・セハーの丘」。2:1908年の781人から始まったブラジル日本移民の原点ともいえるサントスに1998年に建立された記念碑。3:コーヒー器具の歴史、コーヒー栽培の工具などが展示される「旧コーヒー取引所」。4:旧市街地の観光用に走るトラム（路面電車）。5:サントスで楽しみたいグルメのひとつ「シーフードシチュー」。6:カフェなどで名産のコーヒー豆を購入できる。



6

NEWS

キューバ諸国民友好協会よりメダル授与

NGOピースボートはこのたび長年交流のあるキューバ諸国民友好協会（ICAP）から、同協会60周年にあたって、記念メダルを授与された。キューバ大使館で行われた授与式にはNGOピースボート共同代表吉岡達也、ラテンアメリカ担当アドリアン・ゴディネス、松村真澄が出席した。



ICAPは、キューバ革命の翌年1960年に設立され、キューバと世界各国との交流、連帯を進めている団体。ピースボートクルーズでは1990年のハバナ初寄港からお世話になり30年以上にわたって交流を深めてきた。このたびのメダル授与は、ICAPの設立60周年を記念し「キューバ革命を擁護しキューバ国民との友好関係を促進するため活発な活動を続けている団体」としてピースボートが認められ、贈られたものだ。

「キューバ大使館とは日頃から交流をもち、キューバから被爆者証言会へ参加があったり、核兵器廃絶イベントを共催したり同じ志のもと連帯してきました。また過去にピースボートクルーズで20回近くハバナに寄港し、美しい街の観光をはじめ国民に無料で提供される教育・医療機関などの見学も行ってきました。キューバの人々は情に厚く親切で、そうしたふれあひもピースボートの大きな財産になっています。また2010年と2012年の寄港時に、フィデル・カストロ前国家評議会



友好の証として授与された記念メダル。



授与式の後にミゲル大使と記念撮影。

議長との面会が実現したことも忘れられません。私はカストロ議長の懐の深さが印象に残っています。また読書家であり知識も豊富でした。特に核軍縮、核兵器廃絶を願い、核戦争を起すことはならないという信念をもっているリーダーでした」と語る。

5月18日に行われた授与式ではミゲル・ラミレス駐日大使が、ピースボートが経済封鎖で困窮するキューバ国民へ連帯を示していることに謝意を述べた後、核兵器禁止条約の早期批准国として今後も力を合わせていくと力強く語った。また吉岡共同代表は、当日の招待への御礼を伝え、コロナ禍においてキューバが医師団を世界各国に派遣したこと、敬意を表し、和やかな雰囲気の中今後いつそのパートナーシップの発展を誓い合った。



ウクライナ人道支援 現地は今



ウクライナ国内への食料品支援：ガソリン代の高騰や道路事情の悪化が進む中、安全・迅速・確実に物資を届けている。

援団体「CNR」を協働し、難民支援手続きの法的サポートや通訳、受入先のコミュニティ向けのトレーニングなどを担っている。がん患者を支援する「YCE」との協働では緊急性の高い患者の転院支援、患者家族のサポートなどを実施。戦争が長引いても、停戦になっても現地へは継続的なサポートが必要であり、現地へ思いを馳せ多くのの方の支援をお願いしたい。

2022年ウクライナ緊急支援募金

支援先: Peace Action, Training and Research Institute of Romania (PATRIR: ルーマニア平和研究所)を通じて、現地支援を行なっています

戦禍を逃れた人々にあたたかい支援を

詳しくは [PBVウクライナ](#)

お気軽にお問い合わせください

TEL.03-3363-7967

11:00~16:00 土日祝定休



モーリシヤス 重油流出事故から2年

インド洋の島国モーリシヤス沖で大型貨物船が座礁し、重油が流出した事故から、この7月で2年経った。PBVでは早々に緊急支援募金を立ち上げ支援にあたってきた。まず環境回復・保全、コミュニティ活動を行うモーリシヤス野生生物基金(MWF)を支援し、被害を受けた自然保護区のエグレット島から、絶滅危惧種の鳥類、希少種・固有種約4000本の苗木を



漁業や観光業以外の生業手段を習得するためのワークショップに多くの住民が参加。



無事に保護された絶滅危惧種「モモイロバト」。

モーリシヤス島へ移送した。また、モーリシヤス環境保護・保全機構(EPCO)との協働事業を開始し、沿岸コミュニティの生業多様化を支援。漁業から農業、養蜂、カンニ養殖などによる収入源の確保に務めた。こうした取り組みは昨年5月のPBV設立10周年イベントで状況報告を行った。今年5月に現地をフォローアップ訪問し、プロジェクトは一旦終了となる。しかし潜在的ニーズとして同様の事故が起きた際の対応計画、現地のネットワーク構築などがあり、PBVとしては今後も現地NGOと連携してできることに取り組んでいく。

船上百景 [朝の時間]



朝日を浴びながらデッキをウォーキングするのも最高に気持ちがいい。

体も頭も気持ち良く目覚める
一日の始まり

ピースボートクルーズの朝は、水平線から大きく美しく昇ってくる朝日の訪れから始まる。360度見渡す限りの大海原に囲まれた、非常に清々しく気持ちのいい朝。デッキのあちらこちらで、専門講師による数々の健康プログラムがスタートする。ノルディックウォーキングで歩いている人たち。ヨガで心身を整えている人たち。優雅な動きで太極拳に取り組む人たちもいる。乗船前から続けている場合もあるが、むしろ「乗船後に新しい習慣として始めた」というケースの方が多い。続けられる秘訣は、やはり船上ならではの爽快感。今日のはじまりを太陽が祝っているようなデッキには、ちよつと特別な空気が流れているよう。体も頭もすっきり目覚めた後の朝食はまた格別。さあ今日も素敵な一日のはじまりだ。



老若男女にヨガは人気。体の深いところに作用する。



高いエクササイズ効果が期待できるノルディックウォーキング。



「ちむぐくる」沖繩の言葉で「心に宿る深い想い、真心」という意味があります。今年、本土復帰50年を迎えた沖繩。そんな沖繩の対蹠地（たいせきち）という地球のちようど真裏に位置するのは、イグアスの滝があるブラジルのパラナ州です。実はこの州、沖繩や日本のほかにもウクライナと強いつながりがあります。1896年にウクライナからの入植が始まり、1908年には最初の日系移民781名（うち沖繩県民325名）を乗せた笠戸丸がサントス港に入港します。現在、同州の内陸部にはウクライナ系住民が人口の8割を占める町もあり、ロシアによる軍事侵攻で心を痛めている人がブラジルにも多くいることを意味します。

ピースボートクルーズでは、笠戸丸などの移民船と同じ航路でシガポールからアフリカの喜望峰を経由してサントスを訪れますが、出発地も当時と同じく神戸と横浜です。そんな2つの港近くには、移民の歴史を説明・展示している資料館がありますので、ぜひ一度足を運んでみてください。

沖繩では戦前だけでも7万人を超える人々が海を渡り、想像を絶する過酷な状況を生きてきます。その後、戦後焼け野原となった沖繩にいち早く救援物資を送り、苦しむ沖繩の人々を救ってきたのは、移住者の方々のちむぐくるでした。

日本から最初の移民船が出航して100年以上の歳月が流れましたが、現代を航海するピースボートも、時をこえ海をこえて、ちむぐくるをまなび、はぐくみ、とどける旅をつくっていききたいと思います。（N-I）